

## 撮影行為と感情

—写真家の言葉を手がかりに

甲斐義明 (新潟大学)

---

本発表では、撮影行為という観点から見たとき、写真はどのような感情を引き起こすのか、について写真家の言葉を手がかりに考察する。発表の前半では、近年の写真研究において、写真と感情の関係についてどのような議論が行われてきたかを検討する。Elsbeth H. Brown と Thy Phu による共編著『Feeling Photography』(2014年)の出版からも見て取れるように、ここ十年ほどの写真研究においては、感情(emotion)や感覚(feeling)はキーワードにさえなっている。その背景には、1980年以降に影響力を持った写真研究や写真理論が、写真イメージと社会のイデオロギーとの共犯関係を明らかにするために、主に写真の生産や流通の場面に注目してきた結果、写真の受容の側面、とりわけ私たちの写真に対する個人的で、親密な関係に対する考察が長らく等閑にされてきたという事情がある。最近の写真研究の大きな流れとして、この偏りを解消しようという試みが様々な論者によって行われてきた。

写真研究のこうした最近の展開においてほとんど常に参照され、出版後25年以上経って新たな関心の対象となっているのが、ロラン・バルトの『明るい部屋』である。写真がそれを見る個人に引き起こす感情を論じる際にこの本が採用するアプローチは、確かに他に類を見ないものである。だが、バルトは著書の冒頭部で、写真の「三つの実践」のうち「撮ること」は、彼に「閉ざされているので、それを検討しようとはつとめるべくもなかった」と述べており、このことは現代の写真実践を考えるための参照項としての『明るい部屋』の限界も示している。実際、『明るい部屋』に依拠して書かれた、写真と感情についての近年の論考はその大半が「見ること」についてのみ論じており、「撮ること」については十分に考察されていない。

ピエール・ブルデューやスーザン・ソントグの写真論において典型的にそうであるように、アマチュアによる撮影行為は否定的もしくは批判的に捉えられることが多かった。他方で、一般人が写真を撮ることの社会的・個人的意義を唱える言説も、以前から積み上げられてきたことも無視できない。写真と感情の関係という視点から見たとき、注目に対するのは、カメラを持つことが感覚の鋭敏化をもたらすという主張である。例えば大辻清司は1975年に「写真を撮りながら町をぶらぶら歩いていると、漫然と歩いているときより事物がはっきり見えてくるものです」と書いている。あるいは最近、森山大道は「カメラを持っているときは、自然と身体全体の細胞がアワ立ってくる」と述べている。こうした実作者たちの言葉は、撮影行為における感情、とりわけそのポジティブな側面について思考するための、重要なヒントを差し出していることを本発表では示したい。